

第9号

発行

小松同窓会本部

〒923 小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

編集人 宮崎 榮

印刷 北譜印刷株式会社



謹賀新年

平成7年元旦



恥を知れ！清潔たれ！

会長 仲井 信雄

アメリカの19才のマイケル・フェイ君がシンガポールで駐車中の自動車群にペンキでいたずら書きをした。するとこの犯罪は彼の尻に4回鞭打ちする事で報われた。この刑は皮を裂き出血させ半永久的に癩痕が残ると言う酷なものである。

アメリカ人は暴挙として反対し非難したが、シンガポールは動じなかった。シンガポールには自国の法律があるとして、毅然たる態度を維持した。立派だ。

私が初めてシンガポールを訪れたのは約25年も前だった。葎の吸殻のポイ捨てもガムの吐き捨ても罰金5万円だと添乗員に厳しく注意されたものだ。シンガポールの前首相リー・クワン・ユー氏は、麻薬を厳しく取締るには結局死刑しかないとして、麻薬を保持してただけで死刑を科し、生命を絶たれた人は既に何人もいと言った。死刑の是非はさて置いて、この厳罰こそがハードウェアにもソフトウェアにもシンガポールの国際的・社会的清潔さを強く維持している最大の原因であろう。

さて、この国の高い向学性は学問の根本を指しているながら、資源に乏しい国が生き残りをかけてよい頭脳の開発に強力で行動している。その結果、欧州の企業役員の秘書役をかって出て、役員が得たその日の情報を翌昼間（欧州の夜間）に処理し、夕方（欧州では翌朝）その役

員に届けると言う極めて効率的・頭腦的な仕事を行っている。極めて小さな国が、世界最大とも言われる極めて広い飛行場を持ち、多くの国の人々を自由に出入国させて、それでも恐ろしいむごい犯罪が生じないのは、厳しい法の網があり、それによって自由人を安心させているからであろう。リー・クワン・ユー氏の毅然たる方針と態度には、政治を司る人として基本的な魅力を感じる。よい政治家がよい政治を生みその国の方向づけが決る。当然の事である。

さて日本政府の行った奇々怪々な例を挙げると、政府には約201兆円の借金がある。それはとりも直さず国民の担う借金であって、赤ちゃん1人が生れるとその瞬間既に、160万円余の借金をもっているのだ。こんな悲しい事は一体誰の所為なのであろうか。この責任は誰にあるのだろうか。又ODA（政府開発援助）が外国に対して何をしてきたのかその計画もその結果も国民に全く知らされていないが、例えばインドネシアの首都ジャカルタでは車が多くなったにも拘わらず、混雑する交差点には信号がないために交通事故が多発している。そこでODAはCT（コンピュータX線断層装置）を贈った。これを操作する技術者と診断する医師が要るが、目下機械は止ったまままだそのうな。すると人々は多分約1億円余の高価なものをくれるよりもヘルメットをたくさんくれた方がよかったとか。又インドに贈った耕運機は土の固さに歯が立た

ず、歯こぼれして動かない。すると人々は農耕用の馬を買った方がよかったと言っているそう。太平洋の某小島の珊瑚礁の上に作られた突堤は完成後7日間で台風に破壊されてしまったし、贈った大型旋盤は使われないので錆ついたとテレビが伝えている。日本の鮪漁のための操業権獲得の下心を人々は見抜いているようだし、誠意のないODAを決して有難く思っていない。

所で、日本では国会議員の給料は日本最高額のものでなければならぬと言った。例えば比例代表制で特に大きな努力なしに当選した参議院議員に、年間約5千万円の俸給があるそう。6年間の任期間では総額3億円になる。基礎医学者が大学院を卒業して（大学及大学院計10年）就職し、それから定年まで勤めると、その間の取得サラリーは多分全額で3億円にもなるか。基礎医学者としての苦行の40年間で、失礼だが、たいした能力を持合せていられるとは思われない参議院議員の6年間の収入に匹敵するとしたら、この馬鹿さを一体誰が処理するのか。戦後から現在に至る落第・退学など厳しさぬきの教育は、日本人を国際的・社会的に馬鹿にし、規則を守る事を知らない、約束を破るのを何とも思わない、そして四方八方への配慮を持たない国民を作ってしまった。

恥を知れ、清潔であれと大声で叫びたいのは私だけではないと思いたいものである。

（中学42回）

ご紹介頂きました亀淵です。かつて、緯度変化のZ項の発見で知られる木村栄博士が本校で講演された折り、当時の小松中学校校長妹尾盛親先生が木村博士に向かって「少し難しくても結構ですから、学問的にしっかりした話をして下さい。」と要望されたという事です。この話を私は中学二、三年生の頃、中谷吉郎先生の講演で聞きましたが、私自身もこのことを肝に銘じて、講演に入りたいと存じます。と申しましたも、徒に堅苦しく、難しい話をするつもりはございません。

理論物理学の一部分、素粒子論の研究を始めて四十五年程になります。通常、物理学は諸科学(自然科学)の基礎であると考えられています。ですから私のこれからのお話は自ずと物理学中心になりましょうが、科学全般に通じる面もあろうかと考えています。

科学(自然科学)とは、人間の自然(宇宙)に対する一つの態度、思想である、と私は考えます。具体的には自然をよく眺め、その背後に潜む自然法則を探究するのが科学の実務となります。よく科学

者は、自然をありのままの姿で、なんらの偏見もなしに眺める、といわれますが、私は、何らかの偏見(先入観・経験)や立場(観点)と言うようなものが必要だと考えています。例えば、胸部レントゲン写真を虚心坦懐に眺めても何も分かりません。それでは結局、「見れども見えず」となってしまふからです。「ケプラーの三法則」を発見したケプラーにしても、太陽は宇宙の中

創立九十五周年記念講演要旨

科学とはどういふものか

筑波大学名誉教授 亀淵 迪

は決して自然そのものを写し取ったものではなく、その特徴の幾つかを表しているに過ぎません。例えば、原子核があつて、その周囲をいくつかの電子が回っている「ボーアの原子模型」も、この意味での模型なのです。我々は我々の立場、先入観で物を眺め模型を作る。これは、人工的な

我々人間の側の作業です。この体育館が今、明るい、と言いましても、千二百名の人の

経験が増えるに従つて変わっていく似顔絵です。例えば、電子の場合でも、一八九七年のJ・J・トムソン、一九二四年のL・ドブローイ、一九二六年のN・ボーアへと、現在我々が持っている電子の模型に至るまでに幾多の変遷を重ねているのです。

先ほど、自然を眺めるには、なんらかの先入観、立場というものが定まっていけないといけませんでしたが、そこ

には、近代科学が勃興した一七世紀の初め頃に現れた「近代科学の精神」——ベ

ーコン、デカルト、ガリレオ、

ニュートンといった人達の考え方が今日でも色濃く残っています。一六八七年にニュートンが「自然哲学の数学的原理」(プリンキピア)で示した考え方が今日でも生きて

います。この本で彼が前提とした絶対性・因果性・要素性の三つが、今日の科学者の自然を眺める場合に持つ先入観であると言えます。

ついでに、科学の現状についても若干触れておきますと、

一つには、経済的理由で、科学者のやりたい実験ができなくなつてきている、ということがあります。このような事情とは、おそらく科学の歴史が始まって以来最初のことでしよう。例えば、素粒子の内部を調べるのに必要な、アメリカが提案していたSSCという実験装置は、大体一兆円以上もかかり、結局中止となりました。また一つには、ある研究結果を他の研究グループが再検証するのが困難になりつつあります。例えば、トッブ・クオークという素粒子の発見に至るまでには、日米伊の一千名に近い学者・技術者のグループが、十数年の時間と巨額の費用とを費やしました。他のグループがこれを再検証するのは容易なことではありません。

結局、科学というものは、ちょうど芸術家が作品を創るように、人間が創つたものです。いったんでき上がつてしまつと、一人歩きをし、人間に影響を及ぼし始めます。ですから科学においても、人間性を回復するような考え方をすべきだ、というのが私の主張です。科学の基礎的な三つ

心でなくてはならないという信念からデータ解釈を行ったからこそ、三法則の発見に至つたと言われています。遠くから人が歩いてくると、見た目には段々大きくなる。しかし、大きさの変化は、我々とその人の距離によるのだというふうな、こちら側でデータ解釈を行うわけです。

また、我々は物事を理解するために「模型二」(モデル)というものを作ります。これ

の考え方―絶対性・因果性・要素性を、そしてそれぞれ、

相対性・合目的性・全体性という面からもう一度考え直すことが必要だと思っています。

最後に科学の将来、或いは人間の将来、というようなことを少し考えてみたいと思います。中世では人間の主な関心は宗教あたりにありましたが、近代になると、それは科学へと移りました。そして二十世紀の科学の中心は物理学、特に原子物理学でした。しかし、来世紀では、生物学が物理学に取って変わり、科学の主役となることでしょうか。バイオ技術が発達し、「超人間」

のようなものすら作れるかも知れません。

原子爆弾を作ったとき、オッペンハイマー、アインシュタイン、ボーアといった人たちは非常に反省をしました。つまり、科学研究において、無制限な自由は許されるのかどうか、この世界には人間として知ってはいけないことがあるのではないかと、という、そういう反省です。科学の進歩することが無条件によいことなのかどうか、という問題です。我々が善悪の判断をする場合、個々の国家とか、民族とか、宗教上の立場からではなく、人類の存続というこ

阪神大震災被災地の 小松同窓会の皆様に心より お見舞い申し上げます。

平成七年一月二十七日

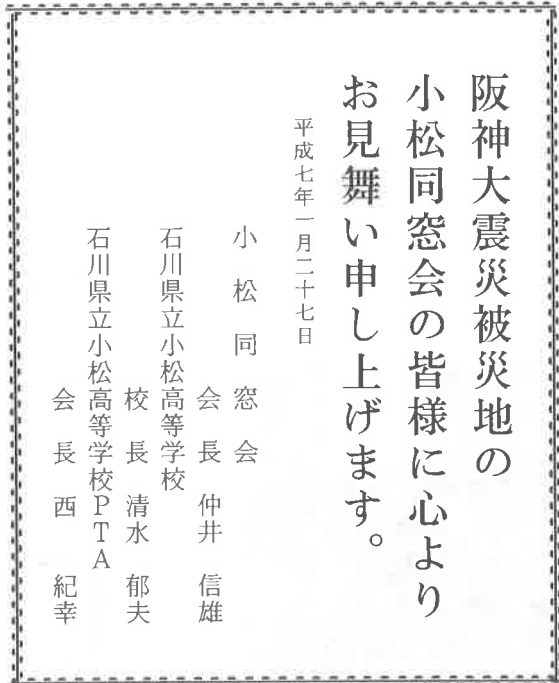
小松同窓会

石川県立小松高等学校

校長 清水 郁夫

石川県立小松高等学校PTA

会長 西 紀幸



とを最高の原理にすべきだと私は考えます。これを私は「善の公理」と呼んでおります。しかし、近い将来には善の公理でも律しきれない問題―例えば「人間」をやめて「超人間」になってよいかどうか―が出現することでしょう。現在SFであることが、二千五十年頃にはSNF（サイエンス・ノン・フィクション）になることが大いにありうるからです。

まとめて申し上げますと、今世紀の科学は「原子の時代」でした。原子の時代で我々人類は、人類を絶滅させるような方法を知りました。そして来世紀は「生命の時代」ですけれども、おそらく、「人間」という種を改変するような方法を知るのではないのでしょうか。

うです。科学者の目から今の世の中の動きを見ていると人類の存続に対して、なんらの保証もないような印象をすら受けます。

皆さんが世の中に出ていかれて、具体的な問題を処理しなければならぬ時に、日常業務に埋没していないで、時にはもっと遠い将来のこと、人類全体のことも考えていたいただきたいと思えます。そういう際に、今日お話ししたことが何らかの参考になれば幸いです。



講演中の亀淵氏

なお、講演当日（十月五日午後）、同期生の新谷邦夫・鈴木外夫・達忠志・谷口文泰・堂下達人・福田康平・吉田三郎の諸氏が駆けつけて聴講され、講演終了後は打ち揃って、記念館、同窓会館資料室、集会室、青雲の小径、天守台などを訪れ、暫しの間小松中学校生の昔に戻り、旧交を暖められた。

六十周年の思い出

科学の発展がもたらすこのような状況の他にも、公害・エネルギー・人口増加などの問題が、放置されるならば、程なくして、人類の存続そのものを危うくするのは必至です。しかしながら一般市民も、政府も、そして国連も、どうせ先のことだと考えて、状況認識がどうも安易に過ぎるよ

講師略歴
中学四十二回卒。四高、名大物理学科卒。コペンハーゲン大、ロンドン大研究員を経て、昭和三十八年より東京教育大（現筑波大）勤務（助教、教授）。平成三年同大を定年退官、名誉教授となる。現在日本大学原子力研究所嘱託研究員。著書には、「時間とは何か」（共著、中央公論社）、「物理と実在」（訳書、丸善）等がある。

古曾部三郎
昭和三十四（一九五九）年十一月一日、創立六十周年記念式に次の書状をいただきました。
拜啓 天高く菊花かおる好季

益々御清福の御趣大慶至極に存じます。

さて今秋創立六十周年を迎えました本校ではPTA、同窓会の御協力のもと図書館建設工事をはじめ各種事業を計画し目下完成への歩を進めておりますが、その一環として十一月一日(日)午前十時より本校に於て謝恩式を挙行し、先生はじめ本校並に前身校に永年御勤続下さいました先生方多年に亘る御高恩に對し聊か謝恩の微表を表したいと存じます。

御多繁の折柄まことに恐縮に存じますが万障おくり合わせの上是非御來校の榮を賜わりたくこゝに御案内申上げます。

昭和三十四年十月十五日
石川県立小松高等学校校長
小松 同窓 会 長

松 村 茂

小松高校創立六十周年

記念事業委員会長

畑 久 治

古曾部三郎 殿

尚準備の都合もありますので御來否同封葉書を以て二十五日迄に御一報願いますならば幸甚に存じます。

失礼ながら御旅費は御來校の際支払わせていただきます

から、左様おふくみ下さい。式後記念図書館で勤続十五年の方々に感謝状と記念品が贈呈された。

その時の記念写真



- 後列右より
尾坂先生
阿戸さん
一柳先生
八田先生
北村先生
河合先生
古曾部先生
浜中先生
清水先生
- 前列右より
山上先生
中川先生
鳥羽先生
中川栄作先生
松村校長
河村先生
森原先生
川畑先生
野田校医

◎創立六十周年記念行事日程

十月二十九日(休)

前夜祭

一七、〇〇一、一九、〇〇 天守台

十月三十日(金)

創立六十周年記念式

九、三〇一、〇、三〇 本校

記念講演

一〇、三〇一、二、〇〇 本校

十月三十一日(土)

記念武道会

九、〇〇一、二、〇〇 本校

記念演劇・音楽会

九、〇〇一、二、〇〇 市公会堂

記念映画会

二、三、〇〇一、二、〇〇 市公会堂

十一月一日(日)

創立六十周年祝賀会

記念図書館竣工式

一〇、〇〇一、二、〇〇 本校

物故同窓会會員追悼法会

一四、〇〇一、一六、〇〇 勝光寺

十一月二日

記念運動会

八三〇一、一六、〇〇 運動場

十月三十日~十一月二日

展示会

八、三〇一、一六、〇〇

本校新校舍 (中学22回)

一週間の悪夢

孫崎久太郎

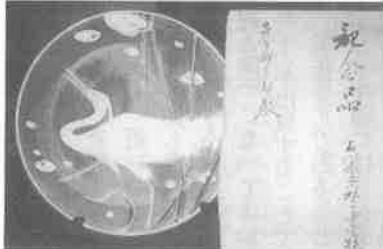
九月二十三日夜九時、中秋の月が皓々と輝いていた。

非常呼集を受けた吾部隊は、夜間行軍で南下、三十軒離れた集結地に翌朝到着し、小休止をしていた。二十四日各地よりの部隊と合流、総勢五百、其の日の夜十時出発、西方二十五軒の山岳地へ進軍、明け二十五日日晡敵陣へ攻撃を開始した。河沿いに進撃するが、敵の反撃が激しく前進不能で其の夜も一睡も出来ずに、河原の葦の中で敵の攻撃の警備に就いた。二十六日攻撃方向を変更し、それより三十軒奥の目的地へ夜を徹して山又山を越えて進軍して行った。

明けて二十七日、両側の險しい山の稜線には、敵の歩哨が点々と我軍の前進を監視している。午後四時、視界が開け

大きな河が現われた。その河を隔てた向こうに、目的地の家並みが見えてきた。河には橋がなく浅瀬の石伝いに渡った。敵の抵抗もなく無事に街の中に入る事が出来た。この街は敵の根拠地と言うだけあって、山奥には珍しく大きな街であったが、吾部隊が来るの情報があつたらしく、猫の子一匹もいなかった。夕方宿舎に入り四日間の睡眠不足を取り戻そうと、久し振りに屋内で床についた。が途端に敵襲の声に起こされ、非常警備に就いた。彼方方から銃声が夜の静寂を破り、部隊は俄に殺気立ってきた。遂にその晩も寝られずに夜が明けた。二十八日朝本隊は目的地の兵器工場、衣服工場に火を放ち、再起不能にして、その作戦の目的を達成した。

燃える街を後に河沿いに帰途についた。右岸は昨日攻撃してきた断崖の道なので、左岸を降りたがこれも山腹を削って出来た、一人一人がやっと通れる道だ。一列進行で行くと山上から手榴弾の攻撃を受け、応戦の手段もなく、無我夢中で走った。すると今度は右側の山上から迫撃砲が一斉に打



記念品 直径約 35 cm
頂いた 佐吉作 私の

ち込まれ、対岸の葦原の中から小銃、機関銃が矢継ぎ早に火を吹いて来た。即時敵陣地へ突撃を開始した。敵は暫く応戦したが山の裏側に逃げ始め、味方はここぞと勇氣百倍、誰からともなく大声で関の声を上げ敵を追っ払い、河下へと降りて行った。だが山の向側には敵の集団が十重二十重と居り、チャルメラを吹いて突撃を仕掛けて来た。その都度白兵戦が展開され、我方も死者、負傷者が続出した。一日中追いつ追われつで、どんな河岸を降り夜になった。動く危険なので河原の葦の中で一睡もせず一夜を過ごした。翌二十九日朝方、眠らず喰わずで疲労困憊の兵員を本部へ帰らすには、河岸にある標高五五六米の高地を占領しなければ全滅してしまうと、山頂への総攻撃が始められた。この日の戦闘は前日より一段と激しく苛烈を極めた。辛うじて頂上を占領する事が出来たが、部隊長も腰に銃弾を受け重傷を負われ、担架の上での指揮となった。夕方になって友軍の戦闘機が三機飛来し、山頂を旋回、四方の敵を機銃掃射して廻ったので、ようや

く敵の攻撃も静まった。夜になって谷間の川の流れに沿って降り、夜通し歩いた。三十日朝方ようやく平地に脱出することができた。応援に来ていた友軍の宿舎に辿り着いたのは夕方だった。一週間何も喰わずにいるといきなり飯は喉を通らず、白菜の味噌汁を腹一杯食べ、前後不覚で十一月一日朝、日が高くなった頃にやっと目が覚めた。(中学30回)

大正のつばやき
伊東 清雄

「降る雪や明治は遠くなり
にけり」。明治は言わずもがな、大正も遠くなった。わがクラスが小松中学校を卒業してから六十年経った。

この間、戦前・戦中・戦後と日本の疾風怒涛の渦中に巻き込まれながらも生き抜き、今や第二・第三の職場も退いて年金暮らし。

振り返ってみると、戦前は軍部が国政の主導権を握って以来ファシズム傾向が強くなって自由主義は影を潜めた。われわれの学生時代は国体の本義・忠君愛国・皇民化教育が施され、それは開戦前夜にそ

の極に達した。そして開戦と共にわれわれの年代は逸早く召集されて最前線に駆り出された。私自身にしても学徒出陣に先立つ二年前、開戦の年には海軍に投じていた。私は幸い生還できたものの多くの級友が戦死したことは痛ましい。

戦後は占領下において革命的とも言うべき価値観の転換。復員者は敗戦の虚脱と価値観の大転換に戸惑いながらも国民主権・民主主義・個人の尊厳に馴染むことに努め、废墟耐乏生活の中にも経済の復興に励んだ。かくして経済復興、高度成長に懸命に働いたのが大正生まれだったと言えよう。

その大正生まれも既に古稀、喜寿、傘寿を迎えて、高齢化社会のターゲットになっていく現況である。戦争の悲惨を身を以て体験したこの世代は心底から平和を愛し、思いやりと助け合いの、心の豊かさ

を望んでいるのも共通関心事。私自身は余生は人に迷惑をかけず、少しでも世のため、人のために尽くし、質素に暮らし、背筋をシャンと伸ばした小ぎれいな老人でありたいと望んでいる。(中学31回)

ポツポツ汽車との不思議なご縁
源 智善

SLファンにとっては、垂涎の列車が今もこの小松市内を走っている。

そんな馬鹿なことはないと言われそうだが、実はポツポツ汽車の愛称で旧西尾、金野両村の山峡を走っていた旧尾小屋鉄道のことである。

開業は大正八年というから私より一つ年上であるが、この鉄道とは実に深いご縁がある。私の五年間の旧制小松中学への通学を始め、その後の仕事先との通勤や色んな面で随分と恩恵を蒙った。

又、五二年の廃線の折にも、最後のさよなら列車に運よく便乗でき、彼女との尽きぬ名残りを惜しませて頂いた。

それから五年程して思いがけなく山中町の雪深い森の中

で、スクラックプ寸前の哀れな姿の彼女に再び会った。

当時、私は県の児童会館に勤めていて、運よく彼女を身請けすることができ、ほぼ一年かがりの大手術によって見事に輝くばかりの美女に変身した。園内の短い距離ではあったが、笑顔一杯の子ども達を乗せて、昔懐かしい汽笛を鳴らしながら動き出す誇らしげな彼女の姿を見送った感激は、今も忘れられない。

暫し、昔の通学時代の想い出に浸らせて頂いたものである。今、児童会館では、この鉄道を「なかよし鉄道」と呼び、子ども達の人気者になっているが、同時に全国の鉄道ファンからも支援されて「な



新年詠草

森岡 松潤 (本名 準二 中学23回)

巫女の振る初鈴祓潔し
一本の葱を粗始かな
太筥に能登の海鼠腸縷々とあげ
一といふ字の難しき筆始
高き木の高き吹かれ懸り風



つかしの尾小屋鉄道を守る会が結成されている。

その会の副会長は、往年の尾鉄の下中庄三郎新小松駅長さんであり、私はその会の理事の一人であるとなると誠に不思議なめぐり合わせという外はない。(中学36回)

五十年目の夏

村中 昭三

NHK朝の連続ドラマを見るともなしに見るのが、近頃の日課となってきた。

しかし、現在放映中の「春よ来い」の一節で、「特攻隊の人たちが何人死んだら、戦争が終わるんだらう」という主人公の台詞には、啞然とするとともに、見る気がしなくなつたものである。

昭和十八・九年当時の特攻隊という言葉が目新しく衝撃的なニュースとして流れたような頃に、自分と同じ十五・六才の中学生や女学生の口から「いつ戦争が終わるんだらう」という(負けることがわかつていような)言葉が出るはずもなく、戦後も遠く離れたことで、作者としては仕方のないこととは思いますが、何か割り切れないものを感じ

た次第である。

戦時中、非国民という罪な言葉があった。主人公が、本当にこのような言葉を口にしたり考えていたとすれば、文句なしに非国民どころか危険思想の持主としてレットテルを張られていたことであろう。

ところで、先の細川内閣の時に「太平洋戦争は、侵略戦争であった」と定義づけられた。そこでふと考えたのであるが、中学三年終了後の十九年四月から約一年半もの間海軍に行っていた自分は、言ってみれば、自ら進んで侵略戦争の片棒担ぎに志願したと言ふことになり、「この自分こそ非国民と言ふより、人間としても認められない存在であった」ということになるではないかと複雑な気持ちにもなり、苦笑している今日この頃である。

ともあれ戦後五十年目の今夏、小学校五年から中学三年まで過ごした韓国は慶州にほど近い尚州という町へ、戦争責任とか植民地支配ということから離れて訪ねてみたいと思つている。そして懐かしいかつての我家の跡地や、洛東江のほとりをたずねたいと思

うのである。(中学44回)

「双松会」は青春

関本 孝三

「双松会」とは、旧小松中学校第44・45回同窓会の会名、愛称でもある。私の記憶では、一九七一年(S46)、亥の年から正式に会名として呼称されている。

名付け親は、今は亡き国漢の恩師、また担任もして頂いた愛野明久先生だった。

昭和20、21年、終戦前後、混乱の中で卒業した同窓生だったから、両方の会に掛け、小松の「松」を活かし、「双松会」にされたという事だった。そのうえ、この会名には、先生の人間性豊かな暖かみと実直な人柄の内面に秘められたユーモアがかくされている。「そう、しょうかい」友達が集い、和気あいあいのなかで、何事も「そう、そう、そうしようや」という事で友情を深め、育てていく。そんな願いが込められているのだ。

だからこそ、お互いに友を恋い、競いあい、同窓会に集まる事が楽しかった。歩いている道は違っていても、共に語り合い、学び合い、励まし合うために全国から集まってきた。

「双松会」が結成され、役員を互選して、二年毎に小松近辺を会場に総会を重ねてきた。

歴代の会長(二年任期)は今年で十三代、奇しくも今年亥年の秋、総会がもたれる。

総会には、常に五、六十名以上が出席、必ず恩師達を招き、夜を徹して青春時代に返って様々な想いを語り、再会を約して別れていった。

肩を組み、声高らかに校歌を熱唱する宴のフィナーレ、胸に込み上げる感動の高まりで涙する友もあった。

クラス担任の師は13人、今は加藤先生のみが健在、教科担任の先生は約40人、已に31人の方々が不帰の人となられた。

昨年も年賀状のためにアドレスを開いた。44回で13人、45回は12人、朱線(死亡)が胸を突く。「友達は第二の自己である」哲学者アリストテ

レスの名言を想起し、今年、亥年の総会の盛会を心から願っている。

「双松会」は、まさにこれからが青春である。

(中学45回)

天守台

安田進一郎

小松中学の生徒として、あるいはまた、小松高校の教諭や教頭として、通算十七年もあるが、全く迂闊な話で恐縮であるが、この同窓会々報の新しいタイトル「天守台」を見て、これまで自分が発表して来た文章に、「天主台」と書いていたことに気付いた。

我々、敬虔なキリスト教徒(これは大ウソ)にとつては、「天守」よりも「天主」が慣れていたからかどうか。

教員を定年退職した年に、自費出版した自分史「はたちすぎれば」(なんとともキザな題名!!)にも、小松中学時代の思い出として、「天主台下」という章を設けたが、これが世に数百冊残っているとすると何とも恥ずかしい次第である。

この本を旧知の人達に差し

上げたとき、金沢二水及び金沢錦丘と一緒に勤めたO先生から「私がこのような本を書くと、間違いだらけになるだろうが……」という内容のお手紙を頂いたが、その通りであることを私が犯していたわけである。

しかし、何か屁理屈がつけられないかと、辞書をひいてみた。辞書には「天守閣」があつて、「天守台」はなかつたが、どうも駄目のようであつた。昔の中国の偉人がおっしゃったように、「過ちは改むるに憚ること勿れ。」である。

ここまで書いて来て、思い出したことがあつた。我が恩師の御曹司であり、教え子、かつ、金沢泉丘、小松で同僚であつた現校長先生が、この同窓会報第六号で、「天主台」と書いておられた。日本史の先生である方なので、何かの理由があつて、「天主台」でも正しいのか、はたまた、大先生もウツカリ私の本につられて書き違えてしまわれたものか、一度お伺いしてみたいと思つている。

天守台は正確には櫓台というそのだが、この上に天守閣を復元しようという話を時々

聞く。しかし、我々小松同窓会員にとつては、「天守閣」が忘れられないのではなくて、「天守台」が思い出の故郷なのである。やはり、天守台の上は、天守閣があるのではなく、松の木がある方がしっくりする。戦時中、陸軍が来て、松の木が切られて、腹立たしい思いをしたが、今また、安っぽい天守閣が姿を現すと、私達は、かつての清楚な恋人が、厚化粧のケバケバしいお婆さんになって出て来たのと同じ幻滅を味わうのではないだろうか。天守台の上や、まわりで寝そべって、空行く白雲を眺め、未来の夢を語り合つたことは、我々にとつては、青春の貴重な財宝である。

写真は、小松高校へ赴任した昭和二十五年の夏、一年生の我がホームの女生徒達に囲まれて、天守台の付近で撮つたもので、私は二十



歳、彼女達は十五歳である。ホームには男女合わせて四十数人がいた筈であるが、この写真がなぜ女の子ばかりなのかについては記憶が定かではない。(中学45回)

「讀 小松高校」

林 滋

第7号で請われるままに、「ありがたき心の故郷」と言うことで寄稿させて頂きました。だが、あれから一年、またまた筆を執らせて頂くことになりました。

実は、長男の婚約までご報告したのですが、五月連休の祝言の段階で、一月の仮祝言後に税務大学の本科試験に合格したことがあつて、一年間挙式を延期することになり、七月から上京していたので。本号のご報告というのはその税務大学の事です。

全国から選抜され五百人の入学が許されるのですが、名門大学の教授陣の充実した講義とキッチリ、テストづめの一年、幹部職員養成コースのようでした。ところがその税務大学の校長が、わが小松高校第十五回生の川信雄さん(東京大経済学部卒)だっ

たのです。しかも驚きはそれだけでなく、教科担当責任者の教務課長さんまでが、二十九期卒の岸野悦朗さん(青山学院法学部卒)だったのです。まさに小松高校オンパレード。おかげで、長男も発奮、六月末の卒業式には、二十五名の優等生の中に入り、(金沢国税局管内では七年ぶりとのこと)記念の金時計を頂いて帰りました。

七月以降は、先輩、同僚、後輩と地元小松高校同窓会の皆様のご指導、ご鞭撻を賜わりながら、精進しております。十二月二十三日、一年間お預けだった結婚も終えております。まさに小松高校万歳、心のふるさと万歳とご報告させて頂きます。これからもよろしく。(中学46回)

京の秋(高台寺を訪ねて)

北井美知子

京の秋は華やかで又何故か侘しい。

四季折々商用で出向いた事もあったが忙しく時間を過ごしてとてゆっくり寺院等を訪ねる時間は無かった。漸くフリーの身となってからは一度は訪ねたいと思つて居た東

山の高台寺を秋の一日主人と共に訪れた。ひらひらと風に舞い落ちる紅葉は寺の苔を紅く染めて又青苔を朱色の葉で突き刺す様も見えた。

太閤秀吉の正室で有る北政所高台院(禰寧)様が建立し夫の冥福を祈り伏見城より殿堂を移して建立されたものであつたが殿堂は火災により消失し、お霊屋、開山堂、表門と庭園が残されている。寺と云うよりも小さな庵の感である。平屋で低いお霊屋開山堂であつたが、ねね様の幾つかの調度品に眼を奪われた。

重文である高台院の調度品に施された「秋の七草歌書筆筒」の蒔絵は桃山時代の意匠と技法を代表するもので、平蒔絵や梨地を絵のなかに用いてあり華麗な中にも風格があり、暫しその場に釘付けとなつてしまつた。

奥ゆかしい逸品にねね様の御人柄が偲はれた。

尚愛用されたごまごまの調度品にも惹かれて行く思いで有つた。刻の経つのも忘れて魅入つて居たが短い京の秋の一日も陽差しが翳つて来たかなと思つ

たら、もう釣瓶落しのように暮れかかって来た頃、帰るのも惜しい様な思いで後振り返り去った。

月を詠む秀吉の書や草の庵ねね様や片膝立てて萩の影菊明りねね様遺愛の化粧刷毛お霊屋の古代蒔絵に秋翳る衝立の夢一文字や秋の声

(県女34回)

クムジュンスクール

村 満智子

ネパールのカトマンズからヘリコプターで約一時間、エベレストの秀峰を目前に、標高三千八百メートルのクムジュン村に下り立ちました。

こゝはエベレストの登山口であり、一方、立山の登山口である芦峯寺とは、シェルパー同志の交友が深く、子供達は姉妹校として親しく交流を続けています。

人々は素朴で礼儀正しく、生活面では、いまだに電気は無くランプを使い、燃料にはヤクの糞を利用している。

生徒達は、最近まで石版を使って学習していたそうですが、教育水準は驚く程高い。校庭には平屋の小さな校舎が五、六棟在りましたが、「雨

の日でも皆で使えるホールが在れば」と云う、切なる思いを聞いた芦峯小学校の子供達は、それから懸命に古切手や空缶集めを始め、私共「国際ソロブチミスト富山」のメンバーは、其の心根に感銘を受け、協力の手を差し延べる事になりました。

ホールは十メートルに五十メートルで、予算は材料費の百五十万円。石積み作業は総て父兄が総出で当たり、昨年三月から六ヶ月で完成しました。その竣工式には、校長先生始めPTAの方や、五人の生徒と私達メンバー四人が参加しましたが、シャム校長先生は、「夢にまで見ていたホールが、こんなに早く出来て」と胸をつまらせ、私達は、酸欠でフラフラしながらも、ボランティアの最高の手応えを



味わうことが出来ました。

高山植物の咲き乱れるクムジュン村に名残を惜しみながらヘリポートに向い、

「ひょっとして、私達は、天駆けるボランティアの飛天にさせてもらったのかしら。」平均年齢六十才の天女達の又とない思い出の旅になりました。(県女34回)

ネパールの彼

川東 頼子

幼くして母親を失い、新しい母を迎えられたのは、彼が漸く少年と呼べるようになった頃であった。新しい母に次々と弟や妹が生まれ、気が付いたら彼と兄は、家畜の世話をする口実で、家畜小屋に寝泊りするようになっていた。

或日のことである。いつまでもたっても夕食が届かない。いつもひえや粟の多い食事なのだが、今日はそれさえない。そっとのぞきに行けば母親は

「今日は皆済んでしまった。」と冷たく言うだけである。腹を空かして寝た彼等に神は味方してくれなかった。夜中に大事な水牛が逃げ出したのである。「兄さん、腹減って歩けない。」「腰の所ぎゅっとし

ばるとよい、腹ひっこんだら歩ける。」どうにか水牛を見つけたものの、彼はこんな事していたら大変だ、何とかしなければと考えた。そして彼の家出が始まったのである。

叔母さんの家の畑仕事、塩売りに、トレッキングのポーター。食事にありつけるキッチンポリー。その間に頭のいい彼は、

山の名前をすっかり覚え、外国のトレッカーから英語や日本語の盗み習いをして、シェルパ族の出世頭「ガイド」と、じりじりと出世していった。私がそんな彼を知ったのはエベレスト登山基地への旅の時であった。(昭60、彼31才)

そしてたどたどしいひらがなでの文通が始まった。車の通らない山道を歩き、だんだん畑で自給自足する村、その村の谷の橋が危険と知ったのもその頃である。私の僅かな寄附と、村人との労力で、丸木橋は懸け変えられた。

平成五年春、再びネパールへ訪れた私は、彼の村、ワルン村へと旅をした。貧しいながら自然に融け込んでの村人達の生活に、日本人の忘れてしまった「心」を見て感激した。瞳を輝かせながら、破れ

た本を手にして、床に座って学習している子供達に、ハーモニカとバレーボール一式を贈った。彼から二回目のボール代を受けとったという手紙が来たのはつい最近である。

と同時に十一月の選挙で共産党が勝ち、町はうるさい位勝った勝ったと騒いでいるという知らせもあった。これからのネパール国はどう変化するか未知数だが、出来る限りの友情を育てたいと思っている。

こんな私に賛同して下さる方がおいでないかと心待ちにもしている此の頃である。(市女17回)



ネパールの子供たち

連句は小宇宙

松下 京子

「連句をやってみませんか」と誘われたのが四年前、そして今、私は「連句をやりましょ

うよ」と友達に呼びかけています。

俳句、川柳とともに最近は連句ブームでもあります。

毎年開かれる「国民文化祭」昨年は三重県が開催地でした。

その文芸大会の連句部門で私達が応募した、半歌仙「もの影の巻」が思いもかけず三重県知事賞をいただいたのです。

参加することに意義ありのつもりで送った作品が、大賞十篇の中の第三位に選ばれたのでした。(応募総数四八六巻)

10月22日(前夜祭)、23日(実作、講演、表彰式)の両日、津市で開かれた文芸大会の席上、全国から集まった連句界の大御所や宗匠、多くの先輩方の前で小さくなって賞をいただいてまいりました。

「連句は『座の文学』といわれ、気心の知れ合った仲間(連衆)が集まって一つの作品を合作する文芸である」といわれています。これがまた、かなりうるさいルール(式目)があるのです。

連句を知るには、まず実際に座(連句を巻く場)に参加し、体験することです。

一巻の流れを調整し、連衆

から出された付句を式目に反していないかどうか、前の句とのつながりなどを確認しながら付け進めていくのが捌(さばき)と呼ばれる進行係の役目です。

一度座を同じくすれば「いと同志」といわれるように、初対面の人でもすぐに打ちとけることができるのもまた連句の良さであります。

ともあれ、五七五の発句、七七の脇句から始まり、第三第四とそれぞれ別の人が付けていきます。付け句は、前の句のイメージを広げ、蓮の糸のようなつながりのある句がよいとされています。

また連句は一巻の中に森羅万象、宇宙のすべてを詠み込んでいくのが理想ですが、半歌仙(18句)ではとても全て詠めるものではありません。まず、春夏秋冬の四季があること、月の座、花(桜)の座、恋の句は不可欠の条件です。

私の連句の師は清水一與さん(高校7回、神戸在住、大阪読売新聞社)、今回の連衆は同級生の阿戸さん、塩村さん、先輩の嵐さん、発句をいただいた中谷さんでした。

連句は行間を読むといわれますが、句と句の間にある空間を、それぞれの思いで読んでいただければ幸いです。私達は「兜の会」という連句グループをもっています。(高校8回)

半歌仙「ものの影」の巻 松下 京子 捌

ものの影とがりて見ゆる寒さかな	中谷 淳子 冬
着ぶくれて行く村の学童	松下 京子 冬
金文字の字引の表紙繕ひて	嵐 美代子 雑
はらり落ちたる写真モノクロ	塩村外茂枝 雑
月明かりすがれ瓢箪二つ三つ	阿戸 猛子 秋(月)
旅の眠りにすだく馬追 <small>(うまおひ)</small>	京子 秋
闊歩するシャンゼリーゼの秋深し	外茂枝 秋
ショートカットに耳環きらきら	淳子 雑
あなたとの出会ひは仮面舞踏会	京子 雑
久しぶりねと愛は再び	猛子 雑
透きとほるグラスに映る過去未来	淳子 雑
閻魔もけふは肩休めする	清水 一與 雑
夜泣きの子ねんねんころり夏の月	外茂枝 夏(月)
十葉干して煎じぐすりに	京子 夏
ほほばりし琉球みやげチンスコウ	猛子 雑
若鮎跳ねる水の眩しき	淳子 春
鐘楼も塔も煙りて花ふぶく	美代子 春(花)
山笑ひおり人笑ひおる	一與 春

首尾 平成六年二月二十三日 於 小松市松下宅

雑感

笠間 勝夫

この七月に、五十回目の誕生日が先か、初孫の誕生が先かというわが人生にとって世紀的なできごとを迎え、ある種の興奮を覚えました。

この五十年の人生はとも目まぐるしく、気がつけば母校とさほど遠くない芦城公園の前で、母校へ秀れた人材をできるだけ多くと思いつつ子供さん達と毎日を送っている昨今です。

通う道すがら、一年担任であった尾坂薫先生のお元氣なお姿を拝見することも多く、二年担任の葭谷外余吉先生にはわれわれの塾の加賀市展開の節にはご尽力をいただき、三年担任の南典二先生には、奇遇ながら年一回お会いできる機会があることは誠に懐かしうありがたいことです。

わが「小松高校」生活における当時の先生方は、その後教育界の重鎮となられた方々が多く、方々の薫陶を得た者は実社会において陰に陽に大きなメリットを享受しており他的高校卒業生とは雲泥の差があることは敝然たる事実です。

にもかかわらず、「ゆとりのある学校生活」は「もうひとふんばり」の最後の詰めを怠けさせているように思えてなりません。「文」「武」両道相俟って目的は達せられるはずで、決して「武」「芸」偏重ではないはずです。

「小松高校」へ入った人、他の高校へ入った人、いずれも「高校」へ入ってはじめて、「小松高校」の偉大さを身感ずるはずです。

卒業生のみなさまの「子弟は迷うことなく「小松高校」を目指され、私も及ばずながら、同窓の先賢に続く人材の輩出に、微力ながらお手伝いできればと思います。

スポーツに親しんで

片桐 浩之

小松高校を卒業し、二十二年の歳月を数えようとしています。

これまでの半生の中で、一貫して続けてきた事は、スポーツ全般ではないかと思えます。高校時代迄は、柔道しかせずにおりましたが、腰痛、膝痛の癒えた二十歳頃から、スキー、テニス、ゴルフ、野球、サッ

カーとあらゆる機会を見つけチャレンジすると共に楽しんできました。

会社勤めの関係で三回の転勤をしましたが、その間、スポーツを通じて地域の友達と交流し、今でも前任地の友人と親交ができる事は有難い事だと思っています。



今、毎週、サッカークラブへ通い、小学生の練習に混ざり、又、『四十雀』と称するベテランチームに所属し、年間十数試合に参加しております。三十八歳から始めたサッカーですが、技術の向上よりも、息子二人との共通の話題作り、住んでいる地域の方々の交流を楽しんでいます。

今年の猛暑の中、二十分ハーフの試合にフル出場し、グラウンドを走り廻りましたが、まだまだ体力的にいけるぞーと実感しています。家内からは、「一年中、黒い顔をしてる」と言われ、営業で訪問するお客様からは、

「ゴルフ焼けていいですね」とからかわれていますが、日焼けした精悍な顔と本人だけ悦に入っています。

これからも若い父親のイメージを大事にし、しばらくはサッカーに夢中になろうと思っています。その次は、家内と二人でテニスに再チャレンジしようと思画しています。

「海とテニスと縄文の里」から

辻 俊宏

「海とテニスと縄文の里」石川県のある市町村のキャッチフレーズですが、いったいどこかお分かりになりますか？

答は、能登半島の穴水と珠洲の中間の南岸に位置する鳳至郡能登町でした。人口約一四、〇〇〇人のこの小さな宇出津という漁師町に平成六年四月にオープンしました、石川県水産総合センターが現在の私の職場です。昭和五八年に本校を、六三年に某大学の農学部水産学科を卒業した後、六年間の県庁勤めを経て昨年この地に赴任して参りました。スルメイカやサクラマス等の資源解析及び予測（簡単にいうと、いつ、どこで、どれくら

い獲れるか？ ということ。）や、定置網における資源管理の試験研究などを仕事としております。なにをしているのか想像しがたいものだと思いますが、時には白山丸という船にのり二週間ほど航海に出たり、朝三時に起きて、漁師のじいちゃん達と一緒に定置の網起こしをしたり、またもう何千匹ものスルメイカを解剖したりもしています。

毎日が新鮮な風、新しい出会いにとまどいながら、自分の世界がどんどん広がっているという感じですが。まだ、残念ながら胸をはって言えるような成果はありませんが、いつかは「うーん」と唸らせるような研究を！と考えています。

最後に「テニスで汗を流し、露天風呂に浸かった後に日本一の寿司を食べる」こんな贅沢なアフター5も楽しめる、能登町には是非機会を作って遊びにきて下さい。



宇出津水産総合センター

アジア大会に参加して

北本 英幸

一九九四年十月、広島アジア競技会。この大会に向けて一体何年間練習しただろう。ソフトテニス競技はこの広島アジア大会で初めて正式種目として採用された。そのため、今回金メダルを取ることの意義は非常に大きく、強化練習にも大変な時間と経費がかげられた。

日本代表選手による結団式が終わり、選手村に入村するあたりから、試合へのプレッシャーはどんどん大きくなった。しかし日本のユニフォームを着て総合開会式に出るとそれが消え失せ、この大会に参加できた喜び・すばらしさに再び包まれ、いつのまにか「よし、やってやるぞ。」という決意へ変化した。

心と体のコンディショニングもうまくいき、チームのムードも大いに盛り上がり、結果は団体三位、個人五位。大勢の仲間が応援に駆け付けてくれ、ポイントごとに喜びと悲しみを分かちあってくれた。団体戦の準決勝で負けたときは多

(高校35回)

くの人が選手以上に悲しみ、涙を拭おうともしなかった。

試合に負け、確かに悔しさは感じたが、それ以上にこの晴れの舞台上で試合ができた喜びが今では大きい。自分のようなものがアジア大会にまで参加でき、多くの感動を得ることができたのも、両親を初め、今まで指導いただいた、お世話いただいた方々のお陰である。ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。今後は生徒たちを感動できる場面へと導ける教師・指導者となるよう努力していきたい。

(高校39回)



北本氏に開会式大会アジア広島にて(右端が)

北本選手の主な戦績

- 昭和60年 石川インターハイ ベスト8
- 平成元・2年 インカレ 優勝
- 平成3・5・6年 全日本(天皇帝杯) 優勝

フランスから

徳田 雅子

ピレネー山脈に臨む高台の上に築かれたこの町、PAU(ポー市)に来て早くも八月経ちました。この街は、ナントの勅令で有名なブルボン創始者、アンリ4世が生まれた城があることでも知られています。現在、PAU大学でフランス語を勉強しています。これまでのフランスでの生活で発見したことをお話ししたいと思います。

まず、言語。フランス語を勉強した経験がある方はおわかりでしょうが、仏語には母音が10以上あり、子音も日本語には存在しない子音がたくさんあります。その上にリエゾンがプラスされると全く何を言っているのかわかりません。今では聞き分けられるようになってきましたが、私の発音は、完璧にはまだまだ程遠いものです。語彙面では、英語の場合には1つの動詞、例えば、"get"に"up"などをくっつけて他の意味を表わすことができるのですが、仏語はほとんどの場合、全く別の動詞を使います。その上仏語

には、性、英語より面倒な定冠詞等があります。

大学ではいろいろな国籍の学生と一緒に勉強しているのでも、フランス人だけではなくいろいろな国の人の気質を見ることが出来ます。スウェーデン人は個人主義、女性が強いです。スペイン人は好奇心旺盛でお祭りが大好き。ドイツ人は礼儀正しい。イギリス人はやはりどこかスノッブな感じ。日本人はどうなのでしょう。静かで礼儀正しいかな。仏人に日本のイメージについて聞いたことがあります。各人がカメラを持って団体で旅行する人の国、欧州との貿易の仕方がわかってない国(仏は失業者が現在多いからかな)サムライ、ゲイシャ、スシ……とにかく神秘的な国だそうです。フランス人はというと、個人主義的で好奇心があっても表に出さない。

帰国まで残り少し。時間を有効に使って、いろいろと吸収して帰りたいと思っています。(高校43回)

徳田雅子さんは、東京外大を休学して、平成七年三月までポー大学(フランス)留学中。

ラ・小松

網野久美子(牧田)

昨日、関東小松同窓会で「天守台」誌を頂き懐かしく拝読いたしました。八号に「卒業して半世紀」会誌発刊の記事を見まして、私たちの「ラ・小松」誌を送らせて頂きます。私たちは敗戦後の混乱期、多感な時代を天守台下に過ごしました。その後進学、就職、結婚とそれぞれ上京、



その頃よりクラス会は続いています。そのうちに年一回では話し足りない「会誌をつくらう」ということになり、望郷の念をこめ名称を「ラ・小松」と決め以来二十五年、昨年「卒業して四十年」の記念アンケートを中心に、五十頁になる十五号を発刊しました。還暦をも祝い真紅の表紙です。ラ・小松会では、健脚組の山歩きの間もつづけていますが、定年を機に東京散策の会もはじめました。三月は谷中の朝倉彫塑館より根岸界限へ、四月は船で隅田川をのぼり墨堤公園でお花見、六月は黄さんの町の帝釈天より花菖蒲咲く水元公園へ、という風に顔ぶれは変わりますが十二、三名は参加しています。「散策の会で花の名をいっばい覚えたいよ!」との少年っぽい感想も聞かれます。私たちが今も心一つに楽しくやれるのは「ラ・小松」誌があったからかなとも思います。昨夜は二次会の後、浅草寺のおぼつき市へ繰り出しました。今、机上のほおづきの袋を眺めながら同窓会の余韻の中にペンをとっています。では「天守台」誌の御発展を祈り、編集の皆様の御苦労に深謝いたします。(高校4回)

第6回 関東小松同窓会総会開催

去る平成六年七月九日三時より東京日比谷の帝国ホテルで第六回関東小松同窓会(旧小松中・県立小松女・市立小松女・県立小松高)の総会・懇親会(三年毎開催)が開催された。

当日は梅雨が少々残る日ではありましたが、本部からは仲井信雄会長・清水郁夫校長それに丸次英治関西小松同窓会々長の出席があった。

総会はまず故人に黙禱を捧げ、ついで関東小松同窓会本谷勇会長が挨拶に立ち、多数(475名)の出席に感謝の辞が述べられ、これからも組織作り而努力すると結ばれた。

つづいて会務報告・役員改選がなされ原案通り承認された。つづいて来賓の仲井本部長が御挨拶に立たれ、平成十一年の百周年記念行事の計画等の説明ならびに祝辞を述べられた。また清水校長から母校の近況報告としてスポーツ・進学と県下でも優秀校である旨のお話があった。

総会に続いて懇親会に移り、故郷の銘酒「関白」の鏡開き

を行い、加藤三忍顧問の乾杯の音頭で開宴した。会場の「富士の間」に各学年別のテーブルを作り三年ぶりに再会する級友と杯を酌み交しながら談笑し合ったり、Vサインでカメラに納まったりして予定の二時間があっという間に終宴に近付いた。

今回の総会幹事の学年(高校17・18・19回)の紹介と、次の総会の幹事(高校20・21・22回)の紹介を終え、コーラス部のリードで校歌斉唱で終宴となり、三年後の再会を約して閉会となった。

(高校17回元田記)



「雪の科学館」紹介

中学15回卒業の中谷宇吉郎博士の業績を記念して柴山潟の畔に昨年十一月オープンしました。

片山津、首洗池を右に見て約50mを左折すると、広々とした敷地内に雪の結晶を象っ

た斬新かつ落ち着いた行まいの鉄筋二階建(設計・磯崎新)が見えてきます。

2F入口から入館し階段を1Fに降りると、「博士のひととなり」(科学・芸術・生活や恩師寺田寅彦博士との出会いなど)、「雪の結晶」(低温室・人口装置)、など5つのゾーンに分かれ、音声による説明や美しい写真によって誰でも雪氷研究と博士に触られる展示室があります。

また、そこからは博士が最後の研究をしたグリーンランド氷河の石をモチーフにした中庭が望めます。(談話室より人口霧を発生させ、一層雰囲気を感じ立てる)

2F奥には最新の映像システムにより、博士の生涯を感動的に描いた映画が一時間毎に上映されています。(映写時間約25分)

博士を慕い後に続いた関戸弥太郎氏(中学26回)、孫野長治氏(中学31回)、田中久一郎氏(中学40回)等に関係する展示物もあり、我々同窓生にとって大変魅力ある内容となっております。

是非一度足を運んでみては。場所 加賀市潮津町イ106

☎七六一七一一五―三三三三 開館時間 午前九時～午後五時 入館料五百円 休館日 水曜日



1階展示室

本部だより

◆小松同窓会の平成六年度総会が七月八日六時半より小松市日の出町、サンルート小松にて開催されました。

当日は 会員163名が出席、事務局から平成五年度会務報告、決算報告が行われ、ついで六年度行事予定、予算案が審議、決定されました。その後亀田作雄氏(中学22回)の乾杯で懇親会に移り、大滝幸夫氏(高校21



(回)の司会によりにぎやかに進行、また新趣向として演歌歌手を招き雰囲気盛り上げました。

話題の中心は母校創立百周年で、五年後に向け一層の団結を誓いあい、最後に中学、県女、市女、高校の順に校歌を斉唱し世代を越えた友情を交わし、松崎茂夫氏(中学24回)の万歳三唱で盛況の内に閉会しました。

◆本年度小松市文化賞は山下七志郎氏(中学38回)が受賞されました。戦後の教育・文学の振興発展に尽力、貢献された功績に対して授与されたものです。おめでとございます。

第十号の原稿募集

- ◎メ切 本年5月30日
- ◎内容 自由(在学中の思い出、近況、旅行記、俳句、短歌等)
- ◎長さ 六〇〇字程度
- ◎送先 同窓会本部会報係宛
- ◎発行 平成七年七月同窓会総会

なおできる限り多くの方の文章を掲載するため、連続で投稿された場合、掲載できない場合がございます。ご了承ください。又行事やスナップ写真は歓迎しますが、ポートレートはご遠慮ねがいます。